

# おにぎえ

東京外国語大学 松岡 薫



どろつくどんの曳山



保加町で復元されたサキヤマ

柳川の秋祭りといえば、三柱神社の「おにぎえ」です。大きな曳山と銅鑼や鐘の音に合わせて演じる芸能が特徴的などろつくどんや、華麗な踊りが見る者の目をひく踊山などの行列が市内を巡行する風景をみると、秋を感じる人も多いのではないのでしょうか。

このおにぎえは、三柱神社造営に関する、あるお話に由来します。文政8（1825）年、三柱神社が造営された時、旧柳河町の商人らは無償で手伝い、女性たちは三味線と太鼓で工事に興を添えました。しかし、保加町だけはこれに参加しなかったため、周辺地区から不評を買いました。これをなんとか挽回しようとした保加町は、江戸の神田明神に奉納されていた葛西囃子と京都の祇園祭の山鉾を参考にして、お囃子と山車を作り、翌年行われた三柱神社の遷座式において披露しました。これが、おにぎえになったと伝わっています。

どろつくどんの曳山の構造をしてみると、一本の柱が貫き、柱の上部には町内ごとに異なる作り物と御幣が飾られています。これを地元の人は「ウワボコ」と呼び、京都の祇園祭の山鉾に似た構造をしています。しかし、このウワボコが巡行中や芸能の奉納に合わせて起き上がったたり倒れたりするという機構は、全国的にみても大変珍しいものです。

さて、このおにぎえの行列に小さな山が出ているこ

とをご存じでしょうか。地元の人によると、かつてはどろつくどんの山の前に、「サキヤマ」（あるいは「マエボコ」ともいう）と呼ばれる、小さな山が出ていたそうです。現在は、保加町のみ復元したものが行列に出ています。このサキヤマは学術的には「傘鉾」と呼ばれるものに分類されるでしょう。傘鉾は、曳山が巨大化する前の古い形と考えられており、サキヤマがおにぎえに伝承されていることは、大変興味深いです。

併せて、もう1点。昭和3（1928）年に行われた御大典記念行事の際、柳川全体でおにぎえを出すことになったとき、保加町では山にあがれない小さな子どもたちがウサギの仮装をして一緒に行列したそうです。本当ならカラスの仮装もするはずでしたが、準備が間に合わず、ウサギのみになりました。なぜ、ウサギとカラスかという、曳山の上に飾られた作り物に、ウサギとカラスが描かれているからです。

仮装はこの時だけだったようですが、曳山とともにそれに類似した仮装の行列をするという習俗は、全国的にみられます。京都の祇園祭でも、かつては山鉾巡行の後ろに、仮装した芸者衆が行列を組んで歩いていたそうです。こうした点からも、おにぎえは山鉾屋台行事の特徴をもつ祭礼行事といえます。

ぜひ今年のおにぎえでは、こうした祭りの細部にも注目してみてください。

# 立花宗茂と闇千代 ドラマプロット

—こんな大河ドラマが見てみたい—

第22話

■文=小山田桐子／憐D & N ■イラスト=大久保ヤマト

※この物語は史実を基に、一部フィクションで作成されています。

【問】市観光課観光推進係 ☎ 77・8563

## 第4章

## 奇跡の復活劇、

## 立花宗茂という武将がいた！③

内職と仕送りで宗茂の浪人生活を支える家臣団  
宗茂、初めての節約生活

浪人中の生活はつましいものだったが、京の商人や庄屋たちなど、いつも誰かしら宗茂を支えようとする者が側にいた。それでも浪人の状態で20数名の食い扶持を稼ぐのは簡単なことではない。家臣たちは内職で生活費を稼ぎ、宗茂を支える。

加藤清正のもとに残った小野和泉も元来の儉約にいつそう磨きがかかって守銭奴と陰口をたたかれながらも小銭をためてせつせと仕送りを続けた。

お坊ちゃん育ちの宗茂は庶民の節約術など知る由もない。米が足りず、家臣が雑炊をつくれば、「汁かけ飯が食べたい時は自分でする」と言い、干飯にするため天日干しした残飯を、雨にぬれるままにして、台無しにしてしまう始末。

しかし、家臣たちは腹を立てるところか、「些細なことに気を取られるようでは、再仕官はおぼつかない」とそのおらかさを喜び、より一層身を粉にして、宗茂を支え続けるのだった。

屈折した感情を抱く家康、宗茂を気にしつつも放置続行  
自分を拒絶した男の苦境を楽しむ

家臣団の節約生活がすっかり板につくようになって、家康から声がかかることはなかった。

家康に宗茂を許す気がないわけではない。しかし、自分をはねつけた男が苦しむのを、家康はひそかに楽しんでた。かわいいと思うからこそ、自分を拒んだ宗茂が憎たらしい。

他の浪人生活を送る大名たちのように、露骨に媚びてこないところもまた、好ましく、憎らしかった。

## ～人物紹介～

宗茂と共に生きた有名武将たち③

小早川隆景 (1533～1597)

宗茂が3番目の父と慕った武将。

寡黙で、誇り高く、物事をじっくり考える

慎重派。宗茂と義理の親子の契りを交わし、文禄の役では、立花家が所属する六番隊を率いるなど、公私ともに、深い関係を築く。



毛利秀包 (1567～1601)

宗茂と義兄弟の契りを交わした武将。

毛利元就の九男として生まれ、小早川隆景

の養子となる。厳しい戦いの最中であっても、宗茂を励まし続けるムードメーカー。関ヶ原の敗戦後は、立場の違いから袂を分かつことに…。

